東京バッハ合唱団 月報

［第 747 号］2024 年 9 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731　Fax 専用: 03-3290-5732　郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp　http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO
Monthly Newsletter No.747
September 2024
—
5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

団友・田中克彦先生の卒寿を祝して

バッハ合唱曲の日本語演奏と“田中言語学”？

大村 健二（団員）

田中克彦氏（**右写真**）は、日本を代表する言語学者で、当合唱団の団友のお一人です。岩波新書の 1 冊くらいはお読みになられた方も多いのではないでしょうか。

ゆえあって、当合唱団の団員方とお親しくなられ、いっとき練習にも加わって、2015 年の福島県・南相馬公演の演奏にも参加なさいました。教職のお仕事と活発な執筆活動の合間に、よくも時間があるもんだ、と驚いていました。その後のコンサートにもほぼ毎回ご来聴くださり、年末のクリスマス懇親会や主宰者の誕生日祝いの集まりなどにも、何度もご参加くださっています。

この 6 月 3 日、満 90 歳をお迎えになり、一橋大学の田中ゼミの卒業生が中心となって、卒寿祝いの記念文集が作られました。小生は、もちろん、文字通りの門外漢ですが、光栄にも編集委員会の方からお誘いをいただきましたので、ご親交の御礼を兼ねて、駄文を加えさせていただきました。

以下は、「田中克彦先生 90 歳記念文集」（「同編集員会編・発行」より、お許しを得て転載させていただくものです。（筆者）

田中言語学とバッハ音楽、意表をつく組み合わせでしょうか？

2015年8月の某日、田中先生は、かの J. S. バッハの技巧的な合唱曲、モテット「イエス わが喜び（Jesu, meine Freude）」上演のステージ上に、確かにいらっしゃいました。南相馬市民文化会館の大ホール（1109 席）にほぼ満席の聴衆を集めた、東京バッハ合唱団の「3.11被災地訪問演奏・南相馬公演」の舞台です。

その晩、東京での取材で田中先生に面識のあった全国紙の現地支局員某氏（東京では社会部だったそうです）が、われわれの打ち上げ会場にやってきて、「なぜ、あそこにいらしたんですか？」「なぜ、バッハなんですか？」と、話しかけていたのが思い出されます。田中先生と同じテーブルにいたぼくの目の前での、すっとんきょうな会話は、それは愉快なものでした。御大を良くご存じのみなさまには、大方の察しがおつきでしょう。田中先生といえば、ロシア民謡であり、大ホールではなく歌声喫茶、これが健全な連想です。ぼくも何度かお供させていただいた経験上、これが常識というべきものです。

東京バッハ合唱団は、J. S. バッハの教会カンタータや受難曲などを日本語訳詞で上演する団体で、ぼくはその事務局を担当しています。田中先生が、われわれの前に現れたのは、2007年、当合唱団が創立45周年記念の定期演奏会に、みなさんもよくご存じの「マタイ受難曲」を上演したときのことだったと記憶しています。この受難曲も、上述のモテットも、主宰者の大村恵美子（わが愚妻です）が日本語訳詞をつけて、自らオーケストラ、ソリスト、コーラス陣を指揮して上演します。会場は新装なったばかりの杉並公会堂（荻窪）で、南相馬とほぼ同じ大きさのホールでした。

終演後、ぼくはステージ上の片付けなどを終え、着替えも終えてホワイエに出たところで、ソファーにポツンと腰かけた初老の紳士を発見しました。面識はありませんでしたが、妻から、この公演にご招待したことだけは聞いておりましたので、「田中先生ですか」とお声をかけたのでした。近所のレストランでの打ち上げにお連れしたことは、言うまでもありません。そういえば、その後も「打ち上げ」は、先生を語るキーワードの一つとなるでしょう。

妻とは、ある反戦の集会でのお仲間だったようです。わたくしは初対面ではありましたが、田中克彦というお名前には、若いころから親しみをもっていて、ご著書もいくつか拝読させていただいておりましたので、その打ち上げ会場では、臆面もなく、みなさんにご紹介までしてしまいました。

それが機縁で、その後もコンサートにはよくご来聴いただき（もちろん打ち上げにも）、また練習会場としてお借りしている荻窪の教会（ここの牧師さんも合唱

月報 2024 年 9 月号　CONTENTS

・信州演奏ツアー、お立ちよりください…… p. 2–p. 3
・おたより（諸川春樹/鈴木常彦・修子）…… p. 3
・連載：退屈するのはいそがしい［43］（大野博人）p. 6

団員）に、足をお運びいただくことも度々でした。いつぞやのクリスマスを兼ねた忘年会には、モンゴルからの留学生方を何人もお連れになって参加され、一緒にクリスマスキャロルを歌ったこともありました。そのころには合唱団のメンバーともすっかりお仲間になって、スピーチでは、ほぼ毎回、その教養ゆたかな内容があらぬ方向に下降していったことは、これも皆さん、よくご存じのとおりです。

気がつくと、なんと、バッハの音取りをする練習風景のなかにも田中先生の顔があります。それは、冒頭に触れた南相馬行きの企画のための準備でしたから、ちょうど 10 年ほど前になります。既述のモテットと 2 曲のカンタータが演目でしたので、かなりハードな練習だったに違いありません。その試練の何か月かを耐えて（？）、先生も、新宿発のチャーターバスの一員になっていらっしゃったのです。

どんな内容を歌っていたのかを紹介する場ではありませんが、“ムード”だけでも想像していただくために、曲名（これがどの曲も歌い出しの句です）を掲げておきます。カンタータは「主イエス眠り いかにすべきわが望み」(BWV 81) と「わが心 思い 神に委ねたり」(BWV 92)。これに先に掲げたモテット「イエス わが喜び」（BWV 227）が加わります。キリスト教文化（ドイツ・プロテスタンティズム）のど真ん中であることがお分かりでしょう。いずれも訳詞による上演です。

2011 年の東日本大震災では、東京でもとんでもない揺れでした。報道に接し、大変なことになったと認識したものです。とくに合唱の盛んな福島県には原発事故の被災も加わって、特別な思いを感じていました。何かできることはないか、合唱団のメンバーもみな同じ思いだったはずです。南相馬在住の詩人・若松丈太郎さんが、南相馬近隣の合唱愛好家のグループとのご縁をつくってくださり、2015 年夏のコンサートが実現しました。この日のプログラムは、定期演奏会の位置づけでもあり、4 人の錚々たるソリストと管弦楽団も加わった本格的な音楽会でした。

さて、ここらで表題の本筋に向かわねばなりませんが、すでに紙数がつきています。

「母語」という単語をはじめて自分の語彙のなかに受け容れたのは、田中先生のご著書に触れたことがきっかけだったようです。バッハ・カンタータの母語による上演を続けているわれわれとしては、いつの日か、バッハを母語で歌うということの意義を（意義深いと信じています）、ことばの科学を専門とする方々に、客観的に解き明かしていただきたいと日ごろ思っていました。そんなところへ、大御所がお仲間に加わったわけですから（現在は「団員」から「団友」に出世しました）、いずれ、ご意見を伺いたいものと思っているのです。

ご本人も、確かに日本語でバッハを歌っていらっしゃいましたから。 〈ア〉

■群馬たんばらラベンダーパーク（撮影：千葉光雄）

信州演奏ツアー2024

バカンスのついでに、お立ちよりください

コロナ・パンデミック以来、4 年ぶりのツアーコンサートです。

◆9 月 22 日（日）、秋の特別讃美礼拝
軽井沢追分教会（日本基督教団）、14:30 から
（どなたでもご参加いただけます）

・カンタータ第 6 番《とどまれ我らと 夕闇せまり》BWV 6 より、1）合唱、3）S 斉唱、6）4 声コラール

［演奏］大村恵美子指揮・東京バッハ合唱団、田尻明葉（オルガン）、ＡＲＳ（室内楽）

［アクセス］しなのてつどう線「追分」駅/「御代田」駅からタクシー利用（いずれも 3 キロほど）。クルマ利用、国道 18 号より（駐車場あり）
［所在地］〒389-0115 長野県北佐久郡軽井沢町大字追分 51-3

軽井沢追分教会 教会季報「風がなるとき」No.54（2024.07）より

大村 恵美子（東京バッハ合唱団主宰者）

学生時代の夏、軽井沢に部屋を借りて勉強に明け暮れたことがありました。昔のことです。

1962 年にバッハ合唱団を作ってからは、そのごく初期から、毎夏、信越線のさらに先の野尻湖で合宿を行いました。ハイライトは湖畔のヴォーリズの木造教会堂でのコンサート、避暑の外人宣教師方とそのご家族が常連です。その帰りに中軽で途中下車して、星野の山荘でしばし骨休め、というのが半世紀以上つづいた私の夏の生活でした。東京育ちの私にとって、軽井沢と信州は故郷であり、あこがれの地です。

追分教会へのお招き、とてもうれしく光栄です。讃美のときをご一緒にもてますこと、こころより感謝申しあげます。

＊＊＊

◆9 月 23 日（振替休日）、東京バッハ合唱団 小布施コンサート「バッハときどきモーツァルト、ところにより☆」

14：00 開演（13：30 開場、15：30 終了予定）
小布施町北斎ホール（「北斎館」は別施設、小布施駅前）

＜プログラム＞
（曲順など、チラシと多少異なります）
・アヴェ･ヴェルム･コルプス K.618（4 声部合唱）
・キラキラ星変奏曲 K.265（ピアノ独奏）より
・キラキラ星変奏曲 Version2.0（松尾茂春曲）より
・バッハ・管弦楽組曲第 3 番 BWV1068 より
・バッハ珠玉コラール集（合唱と管弦楽、BWV140、BWV6、BWV147 より）

［演奏］9/22 と同じ

［アクセス］長野駅から長野電鉄長野線で 40 分ほど、小布施駅下車・徒歩 1 分・小布施町役場となり。クルマ利用：上信越自動車道、須坂長野東 IC より 20 分、小布施 PA より 10 分（駐車場あり）
［所在地］〒381-0297 長野県上高井郡小布施町大字小布施 1491-2
［主催］小布施町文化協会
［入場チケット］1000 円（高校生以下無料、全席自由）
（取り扱い：会場受付、高井鴻山記念館、おぶせミュージアム、小布施町文化観光協会、おぶせガイドセンター）

■尾瀬ヶ原（撮影：千葉光雄）

お・た・よ・り

諸川 春樹（後援会員）

猛暑御見舞申し上げます。
三崎町教会での御公演、大変すばらしかったです。
生で拝聴する演奏も合唱も本当に久しぶりで、心が洗われる思いがしました。
日本語歌詞によるカンタータは画期的です。音と言葉（意味）が溶け合ってじわーっと心に沁みこんでくる感覚は、やはり日本語でなければ味わえないものでしょう。
御招待ありがとうございました。次回も楽しみにしております。

鈴木 常彦、修子（元団員とお妹さん）

暑中お見舞い申し上げます。
皆様お元気でしょうか？ 私たちは、少し暑さに負けながらも頑張っています。最近、スローフード協会世田谷で料理を作ったりしました。
災害が多く、能登の地震では水が無くて大変でした。そこで、我が家に雨水タンクをつけることにしました。
まだまだ暑い日が続きます。体調に留意してお過ごしください。

クラウドファンディング、お蔭さまで成立

大村 健二（団員、楽譜出版）

このたびのクラウドファンディング（以下CF と略す）「日本語版楽譜の発行にご協力を」【スタート企画：新刊 2 曲（BWV23、34）の出版支援】へのご賛同をたまわりました皆さまへは、心より御礼を申し上げます。

広報努力の不足のため、公開 CF 上では、目標の募金額には達しませんでしたが、企画内容の重要性とこれまでの実績とを評価されたプラットフォーム（レディフォー社）の認定によって、当 CF 企画はめでたく成立いたしました（公開終了 7 月 31 日、目標額 50 万円に対し達成額 65000 円）。お寄せいただいたご寄付は、上記楽譜 2 点の制作費に充てさせていただき、ご支援者のみなさまには、当該の 2 曲の完成品を贈呈させていただきました。

すべてをネット上で処理しなければならないため、筆者をはじめとする年配者には、賛同の気持ちを実行に移すに際しての壁は巨大だったようです。上に「公開 CF 上では」と記しましたが、匿名を固く言明された上で、多額のご寄付を直接お送りくださった方がいらっしゃったのです。お蔭さまで、公表した目標額にも達しました。改めての感謝を申しあげます。

CF、大きな可能性を感じます。研究を続けます。〈了〉

◆上演用歌詞対訳は，当団ＨＰからご覧いただけます．
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

＜連載随想＞
退屈するのはいそがしい［43］

上がったり下がったり

安曇野閑人　**大野 博人**

30 年ほど前、経済部の記者を 1 年あまりしていた。担当は兜町。証券市場や金融界の動向を記事にするのが仕事だった。

ある日、投資家からの注目度が高い証券アナリストにインタビューした。切った張ったの株の世界には珍しい、もの静かな人だった。市場動向について淡々と説明してくれた。

ひととおり話を聞いたあと、「あなたの株価の予測はよく当たると評判のようですね」と水を向けると、彼はニコリともせずにこう答えた。

「私、地震も予知できるんです」

くらくらっとした。証券アナリストが突然、神がかった予言者に変身してしまった。市場の裏に隠れている異世界をのぞいたような気がした。

金融市場は数字であふれている。何から何まで、ものごとは理詰めで進んでいくような印象を受けがちだ。だが、だからといって合理性が支配している場所ではない。

では、市場を動かしているのは何か。

それが垣間見える経験をしたのは、1995 年 1 月の阪神淡路大震災の時だ。証券取引所の記者室のテレビが、神戸の街のあちこちから火災の煙が立ちのぼる様子を空撮で流していた。ビルや高速道路も倒壊している。まるで空爆を受けた街のよう。犠牲者の数はどんどん増えていく。呆然とするばかりだった。

日本中が喪に服すように、各地でスポーツイベントやコンサート、お祭りが次々中止になっていった。

しかし、いつも以上にお祭り騒ぎになっていたところがある。兜町だ。株や債券の売買が異例の活況を呈していた。打撃を被った企業の株は大幅に下がるのではないか、復興需要が見込まれる建設会社の株は急騰するのではないか。売りか買いか。損か得か。むき出しの欲望と不安が燃えさかるお祭り騒ぎ。

自粛ムードなど、どこ吹く風。欲望と不安がない交ぜの情念に、ブレーキではなくアクセルを踏み込んでいる。それを見ながらこうも考えた。

たくさんの人がひと儲けしたくて株を買えば株は上がる。上がれば、企業は設備投資にも力を入れるだろう。設備投資が進めば、街のインフラや建物などの再建も加速する。人間の度しがたい情念を、前向きのエネルギーに転換するのが市場かもしれない。だとしたら、よくできた仕組みだ。

とはいっても、原動力は欲望と不安だ。しばしば、欲望が欲望を生み、不安が不安を生んで、投資家たちの思惑が迷走を重ねれば、市場メカニズムは機能不全に陥る。

この 8 月、株式市場や為替が激しく動いた。米国の経済統計の数字をめぐる動揺が引き金になったらしい。変動幅は歴史的だったそうだ。しかし、世界が急に歴史的に大きく動いたようには見えない。ウクライナでもガザでも悲惨な戦争は続いている。地球の気候変動や日本の少子高齢化という深刻な問題が新たな局面をむかえてもいない。

社会や経済は、おそろしくたくさんの事情が絡みあって動く。私たちが把握できることもあるが、把握できないことの方がはるかに多いだろう。日本や米国の経済関係の統計だけでその動きを予測するのは無理だ。

しかし、投資家たちはなにか手がかりがほしい。そこを見ていれば間違えないですむように思える手がかり。数字の上がり下がりというわかりやすい形で発表される統計は、その心理にうまく刺さる。そして、市場に参加する人や組織がいっせいに同じ数字を見て同じ方向に駆け出す。

終わりの見えない戦争、深刻化する環境問題、制御不能になりつつあるグローバル経済。こんな五里霧中の状況に陥れば、だれだって抜け出すための目に見える指標がほしい。けれども、目に見えるというだけでなにかを指標にしてもむなしい。

（団友・後援会員、元朝日新聞記者）

■歴史的と言われる株の暴落を伝える新聞.
（写真提供と説明・筆者）

［編集後記］
東京で、冷房の中にいます。
このページに空きができそうになると、どういう訳か世界の情勢に思いが及び、あっちの戦争だ、地球の溶解だ、と話題にしたくなるのは、この欄の主（ぬし）が、外報部の記者だったことと無関係ではなさそうです。
ロシアにもイスラエルにも、それなりの理屈があるようですが、先日、ガザの小児病院にミサイルが撃ち込まれたニュースは、理屈の範囲を遥かに超えていました。
主のメールに、＜今、ベトナムのハノイにいます。昔、走り回っていたインドネシアやカンボジアと似たような東南アジアの街の雰囲気を懐かしく感じています。月末には安曇野にもどります。9 月のコンサートが楽しみです＞と、ありました（K）。